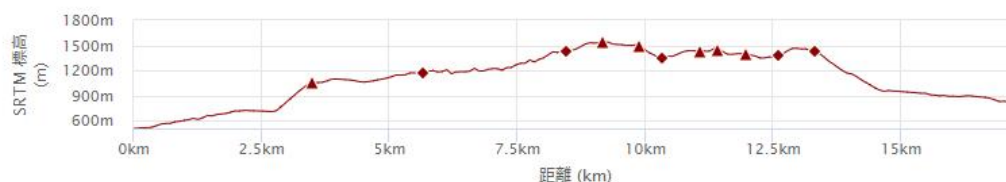
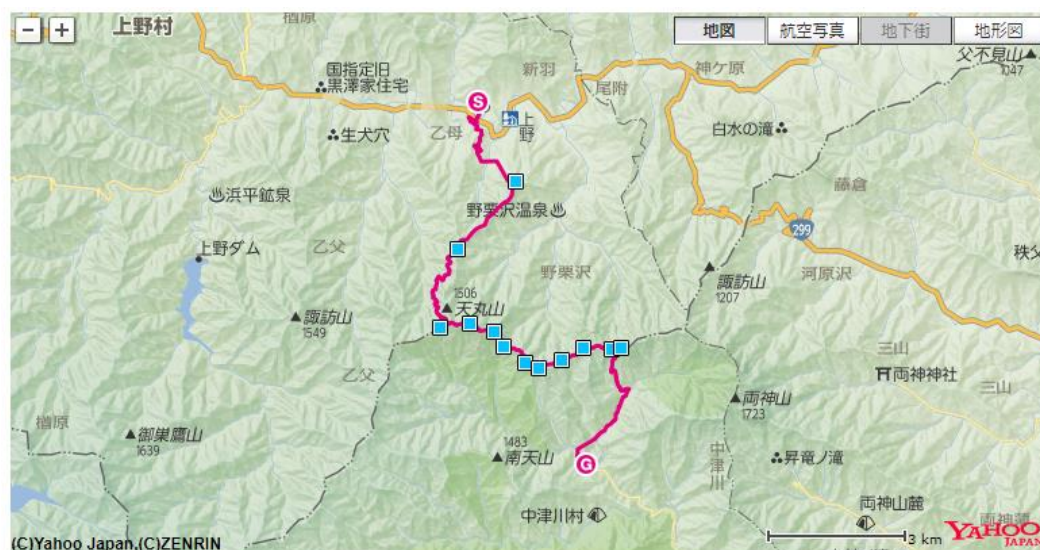


## 金比羅山-倉門山-赤岩峠 山行報告 (赤岩尾根敗退)



(山城) 西上州

(コース) 金比羅山-倉門山-赤岩峠

(日時) 7月1日(日)~7月2日(月)

(天候) 晴れ

(参加者) 室達 (単独)

(山行タイム)

7月1日(日)

8:50 乙母バス停→10:00 上野スカイブリッジ→13:30 社壇の頭→15:40 倉門山先の 1520 コル

7月2日(月)

4:20 1520 コル→6:40 赤岩峠→9:40 赤岩峠 10:20 赤岩峠登山口→11:20 ヒッチハイク→11:40 中津川バス亭

(山行報告)

前日の6月30日は会社の同僚と表妙義を縦走していた。下山したときは16:00過ぎだったので、当日夜に乙母まで行くのは諦めて、高崎駅近くのインターネットカフェで夜を過ごした。明けて7月1日早朝に新町駅よりバスで乙母まで行く。不二洞へいたる曲がりくねった車道をしばらく歩き、不二洞駐車場にある売店で水6リットルを補



給。道中の水場は当てにならないと聞いていたので、この日は2日分の水を背負って歩く必要があった。上野スカイブリッジを渡り、金比羅山登山道を登り始める。金比羅山から続く尾根は比較的明瞭だが、トレースはほとんどない。尾根上は灌木が生えており、ザックが頻繁に引っかかって邪魔をされる。金比羅山から歩いて2時間弱のところに岩峰があり、これを乗り越えようとするが、スズメバチが苔むした岩にたむろっているのを見つける。やむを得ず尾根から大きくくだり、岩峰を巻くことにした。昼過ぎに社壇の頭に着くが、前日の山行の疲れが足に残っていたためか、すでにかなりバテていた。全身を熱気で包むような暑さはすさまじく、なによりザックが重すぎた。この時点で猛烈に帰りたくなってきたが、歩を先へ進める。社壇の頭から馬道のコルまでは少し荒れた登山道。上武国境稜線にいたるこの登山道の後半で、地図の記載通りに水場があった。



涸れることがあるとはちょっと思えないくらいの水量がある沢である。6リットルの水を背負わなくともよかったことを知り、脱力感に襲われる。行動開始時刻が遅かったこともあり、馬道のコルに着いたあとは帳付山ピストンをせず、稜線上を西方へ歩く。倉門山にいたるが、ここから誤って大山方向の尾根に入りこんでしまい、体力を浪費した。倉門山に引き返したところで力が尽き、宿泊予定地の山吹峠よりやや手前の1520コルで泊まった。テントの中で白桃ゼリーを盛大にこぼし、惨めな思いをする。

翌7月2日は深夜2:00に起床、朝食・仮眠後、4:20に出発。焼山手前の岩稜帯は大したことないが、灌木が多めのうえ、くだりが危なっかしく、あまり面白みがない。それよりも、この次の宗四郎山の急登

がすさまじかった。残置されたトラロープで案内されているとはいえ、ここで自分が疲労困憊していることを思い知らされた。宗四郎山から雁掛峠、赤岩峠までは明瞭で歩きやすい尾根筋だが、やたら息が上がる。赤岩峠に7時前に着くものの、すでに戦意喪失し、北方の野栗沢に沿った登山道を使ってエスケープすることにした。ところが、この登山道は完全に消失しているようで、GPSに頼りながらも、それらしきルートの見つかる気配がまるでない。それどころか沢筋にくだれば滝にぶつかるし、尾根筋にくだれば崖っぷちに出る。ついにルートファインディングを諦め、もと来た道を四つん這いの体で引き返し赤岩峠に戻った。南方の登山道をくだって赤岩峠登山口に着いたのは10時過ぎ。ここからバス停まで歩くことを覚悟していたが、採掘会社に勤務しているおじさんの軽トラに道中で乗せてもらい、中津川バス停まで送っていただいた。(了)

